存在スキーマを基本とした日本語の自他交替の分析
－場所の焦点化はどのような構文と意味を創り出すか－

小柳昇（東京外国語大学）

１．はじめに

従来の日本語の自他交替の研究は使役起動交替を中心に進められてきた。それは認知言語学的には行為連鎖モデル（Langacker1991）や因果連鎖モデル（Croft1991）などの認知ネットワークモデルを前提としていた。しかし、日本語の自他動詞構文の全体を分析にするには不十分であり、岡（2013）で主張されているような「場の理論」に基づいた分析が不可欠である。本研究では存在スキーマを基本として拡張した所有スキーマを事態認知に組み込んだモデルを提案する。存在スキーマを基本とする場所を中心にした分析によって非意図的な事象を表す自動詞文と他動詞文の対立が統一的に説明できることを主張する。

２．使役起動交替ではない自他交替をどう説明するか

・図１に示したモデルでうまく説明できること　：(1) のような使役起動交替

・図１に示したモデルでうまく説明できないこと：(2) ～ (6) のような構文交替

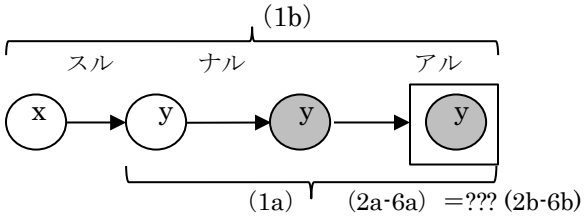

図１　行為連鎖／因果連鎖モデルによる事態の認知の概略

(1) a. グラス $_y$が割れた。　　b. 太郎 $_x$がグラス $_y$を割った。

(2) a. その仕事に(は)危険 $_y$が伴う。　　b. その仕事は危険 $_y$を伴う。

(3) a. 桃の木に実 $_y$が結ぶ。　　b. 桃の木が実 $_y$を結ぶ。

(4) a. 山に地滑り $_y$が起きる。　　b. 山が地滑り $_y$を起こす。

(5) a. 大雨で川の水かさ $_y$が増した。　　b. 大雨で川が水かさ $_y$を増した。

(6) a. 太郎の席 $_y$が(AからBに)かわった。　　b. 太郎は(AからBに)席 $_y$をかわった。

・構文の特徴

(2) (3) (4)：自動詞文の場所句が他動詞文の主語名詞句（または主題）に。

(5) (6)　：自動詞文の主語名詞句「N1 の N2」の「N1」が他動詞文の主語名詞句（または主題）になり、「N2」がヲ格名詞句になっている。

・Langacker（1990）の‘setting subject construction’の扱いは周辺的な構文

３．存在と所有のスキーマとその言語化

・所有を、存在を表す動詞‘BE’で表すか‘HAVE’で表すか（池上 1981）

・世界の言語を見れば、HAVE 言語は少数派である（Benveniste1966）

3.1　本研究が考える BE 存在と BE 所有

・BE 存在と BE 所有は「場所」と「参与者」を関係付ける最も基本的な概念であり、その違いは両者の把握の違いにある。存在が基本であり、人との関連付け（図 2-④⑤）または場所の焦点化（＝際立ちを与える）（図 2-③）あるいはその両方（図 2-⑥⑦）によって BE 所有が生まれると考える。本研究が「所有」と言う場合は、このように存在とのつながりで把握される最も基本的な二者関係のことを指す。

・所有を表す 1～4 の二者関係は、［A］～［C］のような場の中で位置づけられる。

1. 全体⇔部分 2. 主体⇔側面・状態 3. 血縁関係 4. 所有主体⇔所有対象（典型的所有）

［A］実空間（個物や人も見方によって場とみなされる）［B］所有空間［C］関数空間

・「場所の焦点化」の意義：対象の存在が、場所を特徴付けるものとして把握される。

3.2　BE 存在スキーマから BE 所有スキーマへの拡張と構文

（y＝参与者　z＝場所　RP：参照点　T：ﾀｰｹﾞｯﾄ Tr：ﾄﾗｼﾞｪｸﾀ　Lm：ﾗﾝﾄﾞﾏｰｸ）

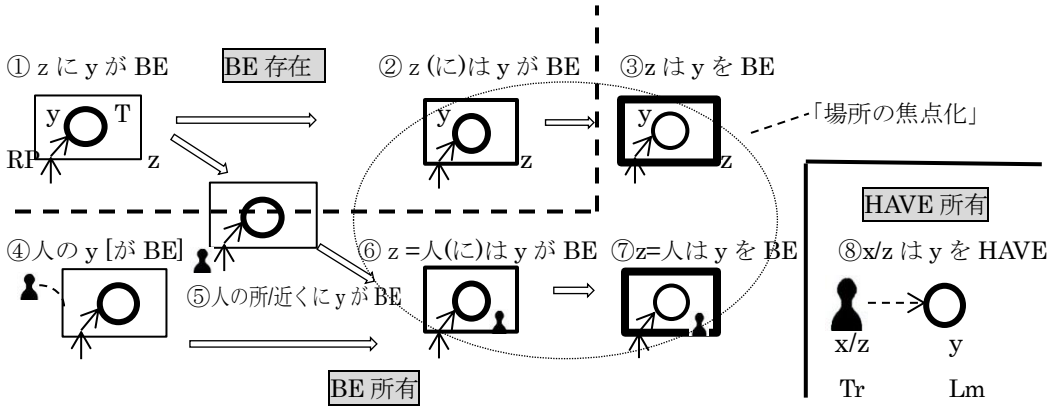

図 2　BE 存在スキーマから BE 所有のスキーマへの拡張

・自動詞文を作る BE 存在①②・BE 所有⑥と他動詞文を作る BE 所有③⑦の自他交替に注目する。（※④⑤は日本語では所有構文とし不自然だが、他の言語では用いられる）

・日本語の「ある」は③⑦で非文だが「が必要だ→を要する」はある。⑦の中国語も参照

BE 存在（自動詞構文）	BE 所有（自動詞構文）	BE 所有（他動詞構文）
① 庭に一本の木がある	④#太郎の車がある	③*庭は一本の木をある
② 庭には一本の木がある	⑤#太郎のところに車がある	⑦*太郎は車をある
	⑥ 太郎(に)は車がある	HAVE 所有（他動詞構文）
（cf. 中国語：②(在) 院子里有一棵树. ⑦太郎有一辆车.）		⑧太郎は車を持っている

3.3　本研究が提案する事態認知モデル　（図１を図３のように拡張する）

図３は図１を上段に据え、BE 存在スキーマを基本に拡張した BE 所有スキーマを中・下段に組み込み、場所が焦点化される事態把握の拡張を組みこんだモデルである。

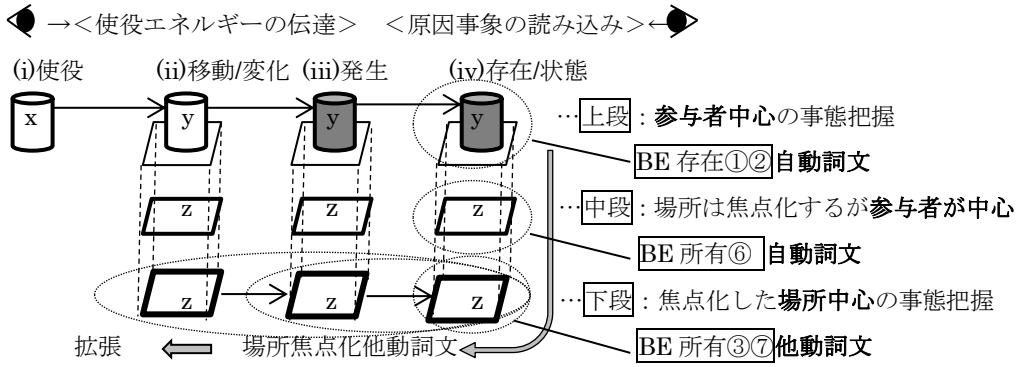

図３　拡張した BE 所有スキーマを組みこんだ認知モデル

４．本研究が提案する認知モデルによる自他交替の説明

・同じ他動詞構文「～が～を V」でも、事態の捉え方によって図 3-上段と下段がある。

上段：**参与者**を中心に仕手から発したエネルギーの伝達と対象の使役変化を捉える

下段：**場所**の変化を参与者との関係で捉える（=所有/非所有から非所有/所有へ）

・下段の主語名詞（z）は上段の使役主（x）とは異なるので受動文が成立しない。つまり場と参与者は主客一体化しているのである。自他交替は上段の主客交替だけでなく、上・中段（＝参与者が主語になる自動詞文）対下段（＝場所が主語になる他動詞文）も見るべき。これが冒頭の例文（2）～（6）の対立の正体である。

4.1　図 3 (iii)＋(iv)の事例：自他同形　→（2b）（3b）

（7）a. 柳の木に芽が吹く　　b. 柳の木が芽を吹く

（8）a. 汚泥から/に有毒ガスが発生する　b. 汚泥が有毒ガスを発生する

両用動詞と呼ばれる動詞。元々形態上対立する他動詞または自動詞がない。

4.2　図 3 (iii)＋(iv)の事例で：自他異形　→（4b）

（9）　a. 街には昔の面影が残る　　b. 街は昔の面影を残す

（10）a. 太郎(に)は熱が出た　　b. 太郎は熱を出した

（11）a. 太郎(に)は協調性が欠ける　　b. 太郎は協調性を欠く

・場の変化を表す動詞の形態には自他同形（4.1 節の例）と自他異形の場合があり、後者には、場所焦点化他動詞構文専用の形態（失う・なくす・[醤油を]切らす、など数は少ない）の場合と使役変化他動詞（図 3 上段）と同形（4b, 9b-11b）の場合がある。事態の把握が異なるのに同形なのは、どちらも第一と第二の際立ちを与えられた二者の関係を叙述するからだと言える。どちらの意味になるかは共起名詞・文脈による。

4.3　図 3　(ii)＋(iv)の事例：自他同形・自他異形　→（5b）

「N1 の N2」のうち所有者（全体・属性の主体）に相当する「N1」が場として焦点化。

（12）a. 台風の勢力が強まり、…　　b. 台風は勢力を強め、…

（13）a. 太郎の心臓の鼓動が速まり、…　b. 太郎は心臓の鼓動を速め、…

4.4　図 3　(ii)＋(iv)の事例：有対自動詞の両用動詞化　→（6b）

形態上対立する他動詞がありながら自動詞と同形の他動詞構文を作る

（14）a.「太郎は席をかえた」　図 3 上段全体の把握：主語名詞は対象をどうしたか

類例：「太郎は仕事を終えた」　「太郎は計算を間違えた」

b.「太郎の席がかわった」図 3 上段右側の把握：対象はどうなったか

類例：「太郎の仕事が終わった」「太郎の計算が間違った」

c.「太郎は席をかわった」図 3 下段全体の把握：場所(=主語名詞)はどうなったか

類例：「太郎は仕事を終わった」「太郎は計算を間違った」

（6b）のヲ格名詞は「[場所]を移動する」という意味概念が関係している（福島 1991）という指摘がある。確かに「～をかわる」は実空間を、「～を終わる」ではそれが時空間に、「～を間違う」では思考空間に拡張していると見られる。しかし、単に移動の意味の自動詞になっているのではない。「太郎は｛地面に手を着く・口/目をあく｝」などの用法と合わせて考えれば場所（＝主語名詞）の特徴付けが変化するという事態把握がその根底にあり、（14c）も場所焦点化他動詞構文であると見るのが妥当である。

＜主要参考文献＞

バンヴェニスト, エミール（1983）『一般言語学の諸問題』みすず書房, [Benveniste, E.（1966）Problémes de Linguistique Génerale の翻訳].

Croft, William（1991）*Foundations Syntactic Categories and Grammatical Relation*: The Cognitive Organization of Information. University of Chicago Press.

福島直恭（1991）「他動性と自動性の対立の解消に関する一考察」『学習院女子短期大学紀要』29, 107-122.

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.

影山太郎（2002）「非対格構造の他動詞」『文法理論：レキシコンと統語』東京大学出版会　119-145.

Langacker, R. W.（1990）*Concept, Image and Symbol*, Mouton de Gruyter.

―　（1991）*Foundations of Cognitive Grammar: Vol.II* , Stanford University Press.

岡智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房.

小柳昇（2010）「コーパスに基づいた漢語サ変動詞の他動詞用法の分析　－「場主語構文」の観点から－」『言語・地域文化研究』16, 東京外国語大学大学院, 69-91.

――　（2011）「存在と所有の意味概念はいかに日本語の言語現象を説明するか　―場主語の視点から―」『第 12 回日本語文法学会　大会発表予稿集』115-122.

須賀一好（1999）「動詞「かわる」の意味と自他」『山形大学日本語教育論集』2, 69-78